

令和元年6月16日現在

機関番号：12701

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04456

研究課題名（和文）多様性を内包した民主主義公共圏における人間形成論の構築に関する研究

研究課題名（英文）Research on theory of self-formation in democratic Public Sphere with Diversity

研究代表者

藤井 佳世（FUJII, Kayo）

横浜国立大学・教育学部・准教授

研究者番号：50454153

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：主に資料の解読と国内外の研究者との交流を通して、コミュニケーションと承認による公共圏の構想から多様な自己実現モデルを取り入れた人間形成論を提案した。とりわけ、承認を媒介する脱中心化としての人間形成論と社会のリニューアル化によって、よりよい自己関係を軸とする柔軟な自己実現のあり方を示した。同時に、人間形成に関わる自己のあり方を巡る問題が政治的コミュニケーションとして顕在化することも明らかになり、批判的教育学の新たな方向性として、言語と感覚の間に発生する自由と主体の生成という視点を獲得した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

グローバル社会における多様な自己実現を可能にするために、民主主義公共圏における人間形成論の構築を進めた。着目したのは、ハーバーマスとホネットのコミュニケーション論と承認論である。それらの考察から明らかになったことは、理想的人間を形成する人間形成論ではなく、環境や社会状況が変化中、よりよい自己関係を軸とする人間形成論の重要性と政治的コミュニケーションの拡大である。人間形成にともなう問題は、私的な問題ではなく社会の正当性に関わる問題であり、政治の現れでもあるため、教育学における従来の問題設定自体を捉え直す必要があることが示された。

研究成果の概要（英文）：I proposed the self-formation theory which adopted various self-realization models from the viewpoint of the public sphere by communication and recognition mainly through analysis of materials and interaction with researchers. In particular, it has become clear that the combination of self-formation theory as decentralization that mediates recognition and the renewal of society enables flexible self-realization based on better self-relationship. At the same time, it also became clear that the issues concerning the way of oneself involved in human-formation appear as political communication. From such a point of view, as a new direction of critical pedagogy, I acquired the perspective of freedom and subject that occur between language and sense.

研究分野：教育哲学

キーワード：教育学 ホネット ハーバーマス 人間形成 民主主義 公共圏

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年のドイツ教育哲学において試みられている人間形成論と人間形成研究の協働は、人間形成論を新たな段階に推し進めている。それらの研究に共通していることは、人間形成論は、現実ばなれした理想的な人間形成を示す理論ではなく、個人のアクチュアルな人間形成を解釈する礎であり、人間形成が社会や制度、文化との関連のなかでいかに行われているかを提示しようとしていることにある。人間形成過程は、単純な人生史の状況やそれに対する直接的な応答ではなく、状況について主体が加工したものであるため、何が真理かではなく、主体が過去・現在・未来の間をどのようにつなぐかに重心がある。

そのような現代の人間形成過程を読み解くアクチュアルな視点として、アクセル・ホネットの「承認」概念が注目されている。なぜなら、承認概念は、親密な関係、第三者関係、能力集団における関係の質の異なる社会集団と自己形成を捉える視点を提供し、現実を複数の視点から多層的に捉えることができるからである。ホネット承認論を手がかりにして人間形成論の構築を進めているストヤノフは、人間形成論に方向づけられた人間形成研究の成果をふまえて、グローバル社会におけるアイデンティティ形成の問題を中心にすえて、主体性の発展過程と「世界の意味地平を切り開くこと」の両方を射程におさめた批判的人間形成論を提案している (Stojanov, K. (2010): "Bildungsprozesse als soziale Geschehnisse," in *Vierteljahrsschrift fuer wissenschaftliche Paedagogik* 86, 558-570)。批判的人間形成論は、パーソナルなアイデンティティと集合的なアイデンティティの違いに注目した理論である。とりわけ、集合的なアイデンティティを超えるパーソナルなアイデンティティ形成は自己の語りを通したまとまりによって可能になるのであり、それが多様な自己実現を可能にするとされる。しかし、批判的人間形成論は、人生において生じる葛藤や不正の感情に十分な注意を向けておらず、政治的領域を欠いた人間形成論の側面を内包している。そのため、「民主主義」や「公共圏」に関する視点からの人間形成論の構築や多様性を可能にする経路を含む理論構築をより詳細に展開する必要がある。

2. 研究の目的

多様な自己実現を可能にする社会を提案しているホネットの民主主義公共圏という構想を手がかりにして、承認とコミュニケーションを織り込んだ人間形成論を提示する。その際、ハーバーマスとホネットの人間形成 (Bildung) 思想の解明を進め、民主主義公共圏と人間形成の関係を明らかにする。さらに、公共圏と民主主義の接続にも注意を向け、プラグマティズム思想とホネット承認論との関係や承認論と政治との接続による特徴についても明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 常時、ホネットとハーバーマスのテキスト、古書 (絶版等) の収集、論文・資料の収集、関連する文献、公共圏と民主主義論、人間形成論の収集を行い、それらを解読・分析する。とりわけ、民主的意志形成プロセスに関するホネットの資料解読から民主主義公共圏の構想と人間形成思想の関係の解読を行う。加えて、ハーバーマスの教育論文や 1960 年代におけるドイツの教育改革に関する資料収集と解読も行う。

(2) 教育学における人間形成論と民主主義論、公共圏の議論に関する資料収集・解読を進めると同時に、他の国内外の研究者と専門的な知識提供、意見交換を行う。

(3) 民主主義公共圏を構成する承認とコミュニケーションのあり方について議論を進めるとともに、それまでに解読した資料を読み直すことや批判的な論考の解読も丁寧に行うことで考察を深める。

4. 研究成果

(1) 民主主義公共圏と人間形成思想

ホネットの民主主義公共圏における人間形成思想は、デューイのプラグマティズム思想とドイツの相互主観性思想が接続し形成されている点に特徴がある。まず、ホネットの人間形成思想は、予め設定された人間像に向かう人間形成ではなく、承認を媒介とする脱中心化された人間形成を中心に据えている。その意味で、承認は人間の個別性と普遍性を組み込んだ営みであるといえる。また、社会は常にリニューアルされていくというデューイの思想とつながる見方として、政治的秩序は常に再解釈や再適応の可能性を含むものとして捉えられている。他方で、初期ハーバーマスの思想から見てきたのは、民主化を目指した1960年代の教育と政治の関係である。ハーバーマスは高等教育改革についてコメントを述べる中で、学問の自律性の遂行と並んで大学の教授陣だけではなく学生や助手を含めた大学のスタッフによる政治的な意志形成のあり方として自治を実践することを民主化の一つのあり方として提案した。その際注目していたことは、社会がリニューアルされていくという方向だけではなく、青年期の心理学的研究を背景にした、自分のことを適切に説明する能力であった。ここに自己形成と政治が言語能力において結びつくことが示された。

(2) ポスト伝統的社会における人間形成論

政治的コミュニケーションの拡大

多様な自己実現を可能にする民主主義公共圏と人間形成論の構築において、現代の社会をどのように捉えるか、その社会における人間形成を構想する視点を欠くことはできない。ドイツの教育哲学者のストヤノフは、今日をポスト伝統的社会と捉え、その社会では複数の社会文化が交差するために、人間の成熟の社会的課題は、異質で複数の世界と出会い、脱地域化を進めることの両方にあると述べ、承認による自己形成と世界の形成に焦点を当てている。この形成は、個人の語りによって絶え間なく遂行されるプロセスであり、単純な言語能力だけではなく知覚の次元への着目とハイブリッドな自己のあり方を促すという特徴を持つ。ここに、今日における生活世界における正当化が再度考察される必要が生じる。すなわち、ハーバーマスのシステムと生活世界という二元的世界理論では、生活形式の変化に伴って見られる正当化の変容を適切かつ十分に捉えることができないのではないかと、という批判理論の研究者の指摘と共鳴することになる。人間形成は、私的な問題に見える内容でも、政治的なコミュニケーションとしての正当性をめぐる問題を伴っている場合もあり、政治的コミュニケーションの拡大から捉える必要がある。このことは、社会における正当性の変容と主体化を結びつけるという人間形成論の拡大を意味する。

批判的教育学と主体化

批判理論を参照した教育学は、批判的教育学と言われる。ドイツでは1960年代ごろに理論的形成がなされ、その後の教育実践にも批判的教育学は影響を与えた。その批判的教育学について、ピースタが指摘していることは、次のとおりである。まず、隠れた権力関係を明らかにし、人々をとらわれた状態から自由にすることを目指してきた批判的教育学は、特権的な知識と解放される人の無理解や劣等を前提としている。加えて、科学や哲学によって示された真実が本当のことであり、真実を知らない状態だった時の経験を疑いの対象とする。このことは、ある共同体の真実を本当の真実として人々に提示することでもある。ここから、何が真実であるかという各共同体同士の争いが引き起こされる。しかし、新たな解放の教育学を構想するピースタは、そうした共同体の解釈を争うのではなく、既存の秩序を中断し、主体化を促す方向へ向かう。その際、ピースタはランシエールの思想を手がかりにして、既存の秩序を中断する政治的行為はディセンサスによって発生するという考えを教育においても導入する。すなわち、秩序の中断は、別の真実の説明から生まれるのではなく、不平等の中に含まれる平等が現れるこ

とによって生じると捉え直すのである。しかし、そのような秩序の中断は、新しい視点を生むことにつながることはあるかもしれないが、そのこと自体が教育の目的になるわけではない点に注意が必要である。

(3) 政治の空間と承認を媒介とする人間形成 アイデンティティと脱アイデンティティ

ホネット承認論に基づく自己実現論は、主体が自己に結びついたアイデンティティを主題とする側面があり、それゆえ、アイデンティティの割り当てがなされていない場合への視点と議論は不十分になりがちである。そこで、国内の教育学ではこれまで十分な議論がなされて来なかったランシエールとホネットの思想を人間形成の視点から考察を進めた。両者の大きな理論的差異は、政治的主体の捉え方と討議が発生する動機にある。承認論から見れば、承認をめぐって交わされるコミュニケーションは、ある規範を実現する社会制度が十分ではない場合やその規範が不当な場合に生じる。それに対して、ランシエールは、それまでの社会になかった配置を生み出すことを別様のあり方の表現として捉え、このことが平等を前提にした政治的主体へつながる。そのため、ランシエールの政治的主体は、脱アイデンティティへのプロセスを意味する。そのようなランシエールによる平等を前提にした思想から見れば、偶然に生じ、言葉の前にある声や音が秩序をかき乱すという政治の側面が重視される。そこから描くことができるのは、別様であることの潜在性を含めた多様性と差異の現れは、言語と感覚の間に発生するということである。この言語と感覚の間の空間は、内部から偶然に発生するため、主体の形成もまた外部のコントロールや外部の働きかけによって成されるのではなく、不平等の中に含まれる平等の現れとともに生じるのである。

よりよい自己関係と人間形成

民主主義公共圏における人間形成論は、よりよい自己関係（自己信頼、自己尊重、自己評価）を軸とする人間形成論である。よりよい自己関係それ自体は説明できない。ホネットによれば、損なわれていない自己関係を「反事実的説明」として捉えなければならない。政治問題と関わるのは、承認が十全になされないことによって歪められた自己関係が生じ、何らかの不正を感じるという経験である。人間の苦しみは、政治の秩序と個人の精神の間に十分な自己関係が形成されていない状況を現しており、その苦しみを説明することによって、秩序と主体の架け橋をつくり、権力の構成につながる回路を形成することができる。確かに、私たちは、そのような苦しみを経験から常によりよい自己関係を形成することは限らないが、平等の現れとしての政治が可能にしてきた自己をかき乱すことも含め、それぞれの場面や舞台における社会的承認のコンフリクトの発生をきっかけに、よりよい自己関係を結び直すことや集合的主体との関係を再解釈することを通して、人間形成のプロセスを変容のプロセスとして描き出すことができる。このように、グローバル社会における多文化社会の中でどのように自己を解釈し、その自己解釈の変容を研究する内容と接続する可能性と視点を獲得することができたため、多様性を内包した民主主義公共圏における人間形成論は広い文脈での現代における人間形成論の基礎的視点を提供するものとして考えることができる。さらに、本研究は、人間形成の思想史研究や人間形成論・人間形成の日独比較研究へ発展する可能性を含んでおり、公共の授業やグローバルシティズンのあり方につながる人間形成と公共圏に関する今後の研究展開の可能性を開いた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4 件)

藤井佳世、「再政治化と批判的教育学 ランシエールとホネットの思想に焦点をあてて」『近

代教育フォーラム』第27号、査読有、2018、50-56頁

藤井佳世、「個人化時代における教育と政治 市民性の涵養という結節点」『教育哲学研究』第115巻、査読無、2017年、8-14頁

藤井佳世、「批判的教育学の批判」『横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅰ』19巻、査読無、2017年、145-162頁

Kayo Fujii, Education and Politics in the Individualized Society: Connection by the Cultivation of Citizenship, English E-Journal of the Philosophy of Education,2,査読無、2017,pp.44-51.

〔学会発表〕(計 3 件)

Kayo Fujii, Yasunori Kashiwagi, Masamich Ueno, Taku Murayama, An analysis of the educational practice of Manabi, Philosophy of Education Society of Australasia,2018

Kayo Fujii, Yasunori Kashiwagi, Masamich Ueno, Another Learning Style in the Global Era: Jananese Self, Recognition and “Manabi”, Philosophy of Education Society of Australasia,2017

MASAMICHI UENO,YASUNORI KASHIWAGI,KAYO FUJII,TAKU MURAYAMA,MANABI,LEARNING AND BILDUNG IN SCHOOLS:TRANSLATION OF EDUCATIONAL DISCOURSE AND IT’S UNDERSTANDING, International Network of Philosophers of Education,2016

〔図書〕(計 1 件)

藤井佳世「承認」427-428頁、教育思想史学会編『教育思想史事典[増補改訂版]』勁草書房、2017年

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。